

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04962

研究課題名(和文)重症化した吃音児・者の感情および情動に対する支援法の構築と展開

研究課題名(英文) Establishing and developing support system for affection and emotions of severe stutters

研究代表者

塩見 将志 (Shiomi, Masashi)

川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・教授

研究者番号：60711215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、社交不安障害検査を用いて吃音者の初診時における社交不安の状態を検討した結果、軽症までを含めると非常に多くの吃音者が社交不安の問題を呈していることが明らかになった。また吃音への訓練法として開発されたRASS(自然で無意識な発話への遡及的アプローチ；retrospective approach to spontaneous speech)が吃音者の持つ社交不安の問題にも有効なアプローチ法であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社交不安障害では社会的状況を回避することが多くなり日常生活に大きな支障をきたすことになることから、吃音児者が社交不安障害を伴っている際には、社交不安障害にも対応可能な訓練法を選択することが必須である。現在、社交不安障害に対し効果的とされている訓練法としては認知行動療法があげられている。そして本研究で、RASS(自然で無意識な発話への遡及的アプローチ；retrospective approach to spontaneous speech)が吃音者の持つ社交不安の問題にも有効なアプローチ法であることを示したことで、社交不安の問題を呈する吃音者への訓練法の選択肢を増やすことが出来たと考える。

研究成果の概要(英文)：In this study, which examined the state of social anxiety in stutters at the time of first visit using the Social Anxiety Disorder Scale, we clarified that a large number of stutters presented with social anxiety, including mild cases. We also suggested that the retrospective approach to spontaneous speech (RASS) developed as a training method for stuttering was effective in addressing social anxiety among stutters.

研究分野：言語聴覚障害学

キーワード：吃音 社交不安障害 RASS

1. 研究開始当初の背景

吃音の基本的特徴は「その人の年齢に不適切な、会話の流暢性と時間的構成の障害」であり、「流暢性の障害は、学業的または職業的遂行能力、または対人的コミュニケーションを妨害している」ことから、吃音児・者は、吃音によって個々の社会的な活動や参加が制限されている状態にある。また吃音の発生に関しては、感情・情動系の問題が関連していることや吃音はストレスや不安により症状が重症化することが知られている。

これらのことは、特に重症化した吃音の背景要因や評価法、さらには訓練法を考える際に感情・情動の問題を無視できないことを示している。そのような中で、感情・情動を含んだ包括的な評価と訓練を一貫して実施している手技として、吃音質問紙と自然で無意識な発話への遡及的アプローチ (Retroactive Approach to Spontaneous Speech 以下 RASS と略す) が挙げられる。吃音質問紙は、自らの発話や場面に対する感情・情動といった包括的な評価を通じて問題点を抽出することが可能となっている。しかし本研究の開始当初は、RASS を採る研究者や臨床家は個別にその成果を 1 症例のみを対象とした報告で行っている状況にあったため、各症例の背景要因に関して収集されている情報が異なることにより、同一基準での比較が難しく、どのような場合に最も効果を発揮し、その限界や予後についての体系的な知見は得がたい状況にあった。

2. 研究の目的

吃音は、幼児期の罹患率が約 8% であり満 5 歳までにその 90% 程度が発症する。発症から 4 年で 74% は自然治癒するとの報告はあるが、吃音が治癒しないまま成長すると話す場面を回避するなどの吃音を隠す工夫を行うことで、社交不安障害が発症していく。社交不安障害とは、社交的な集まりに参加することなどの行動に対して過剰な不安を感じる、またはそのような状況を回避する障害を指している。また社交不安障害は、学業・職業・社交的な機能面で深刻な障害をもたらす生活の質を低下させることから、吃音の臨床では社交不安の状態を把握し対応することが必要である。

そこで本研究では、複数の吃音者に社交不安障害検査 (Social Anxiety Disorder Scale ; 以下、SADS と略す) を実施し吃音者の社交不安の状態を把握するとともに、吃音者の持つ様々な場面に対する「恐れ」についてもアプローチする RASS を実施し、RASS 実施前後での社交不安の状態と予後に関わる因子を検討した。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

研究協力施設を受診し吃音と診断された 21 名を対象とした。なお RASS による改善率と予後に関連する因子を求める際には、21 名のうち、初診時の社交不安障害検査でカットオフポイント以下の吃音者を除いた 18 (男性 15 女性 3) 名を対象とした。

(2) 社交不安の評価方法

対象とした吃音者が研究協力施設を受診した際、初診時 (RASS 実施前) に対象者本人に SADS への回答を求めた。本研究で用いた SADS は、日常生活上の種々な状況における恐怖度 36 点、日常生活上の種々な状況における回避度 36 点、不安の身体症状 40 点、日常生活支障度 30 点の 4 項目で構成されている。また SADS の総合得点は 142 点であり、カットオフポイントは 35 点である。重症度の目安は、軽症 36 点以上 44 点以下、中等症 45 点以上 74 点以下、重症 75 点以上 104 点以下、最重症 105 点以上となっている。

(3) 訓練方法

全ての対象者に RASS を実施した。

(4) 分析方法

社交不安の状態

社交不安障害の合併率を求めた。またカットオフポイント以下の吃音者を除いた 18 (男性 15 女性 3) 名については、重症度分布を求めた。

RASS による社交不安の改善率

SADS の総合得点がカットオフポイント以下になった日を吃音者が伴う社交不安の問題の改善日とした。

対象者の研究協力施設での初診日から、SADS の総合得点がカットオフポイント以下になった日、SADS の総合得点がカットオフポイント以下にならなかった場合には観察終了日まで SADS を最後に実施した日までの期間をその対象者の観察期間とした。

性別、初診時年齢、初診時の SADS 重症度について、それぞれを 2 分し、2 つの群の間での改善率の差をログランク検定で検討した。

4. 研究成果

本研究では、軽症を含めると社交不安の合併率は 86%と非常に高い値を示した。このことから、吃音児者に対しては、発話面のみならず社交不安の問題についても評価することの必要性が示唆された。なお重症度分布は、軽症 5 名(27.8%)、中等症 8 名(44.4%)、重症 3 名(16.7%)、最重症 2 名(11.1%)であった。

また改善率を求めた結果などから、RASS は吃音者が伴う社交不安の問題に対する有効なアプローチ法の 1 つとなり得ると考えられた。

ログランク検定の結果、有意差は認められなかった。しかしながら、今後対象者を増やすことで初診時の重症度が予後に関連する因子と成り得ることが考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 塩見将志、福永真哉、水本豪、池野雅裕、矢野実郎、永見慎輔、岩村健司、都筑澄夫	4. 巻 61
2. 論文標題 吃音質問紙による工夫・回避、恐れに対する評価が有効であった成人吃音者の1改善例	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音声言語医学	6. 最初と最後の頁 188 - 195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福永真哉、塩見将志、時田春樹、池野雅裕、矢野実郎、永見慎輔	4. 巻 60
2. 論文標題 成人吃音者に対するメンタルリハーサルの効果—吃音検査法での評価—	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本音声言語医学	6. 最初と最後の頁 162-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 塩見将志、小内仁子、荻野亜希子、福永真哉、水本豪、矢野実郎、飯村大智、渡嘉敷亮二、花山耕三、都筑澄夫
2. 発表標題 吃音者の社交不安障害検査得点の改善に関連する因子
3. 学会等名 日本吃音・流暢性障害学会第8回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩見将志、小内仁子、福永真哉、水本豪、飯村大智、山崎志穂、渡嘉敷亮二、都筑澄夫
2. 発表標題 吃音者が持つ社交不安に対するRetrospective Approach to Spontaneous Speechの効果について
3. 学会等名 第65回日本音声言語医学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩見将志、小内仁子、平田暢子、福永真哉、水本豪、都筑澄夫、渡嘉敷亮二
2. 発表標題 思春期以降の吃音者に認められる社交不安の状態についての検討
3. 学会等名 日本音声言語医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masashi Shiomi, Sumio Tsuzuki, Hirotsugu Ennokoshi, Go Mizumoto, Shinya Fukunaga
2. 発表標題 The effectiveness of a mental rehearsal program for adult stutterers
3. 学会等名 10th Biennial Asia Pacific Conference on Speech, Language and Hearing (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福永 真哉 (Fukunaga Shinya) (00296188)	川崎医療福祉大学・リハビリテーション学部・教授 (35309)	
研究分担者	水本 豪 (Mizumoto Go) (20531635)	熊本保健科学大学・保健科学部・准教授 (37409)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------